

学習英和辞典における類義語の語義比較

——動詞編——

澤 泰人*

A Comparative Study on Word Definitions of Synonymous Verbs in English-Japanese Dictionaries for General Learners

Yasuto Sawa

Abstract: Numerous efforts have been made so far with a view to improving English-Japanese dictionaries for general learners. There is, however, still much to be desired for the dictionaries to be of such great value as to provide learners with really essential information. In particular, word definitions of synonyms have been one of the centers of compilers' attention, requiring better ways of illustrating their meanings so that learners can understand the nuances which they have. This paper, dealing with word definitions of synonymous verbs, is aimed at presenting the ways of defining the meanings of synonyms that are most helpful for learners' use.

0. はじめに

人々の英語学習に対する熱意が冷めることを知らない昨今の日本においては、かつてなく学習英和辞典が隆盛を誇っているといいよう。とりわけ、英語の基礎及び中級学習者と思われる中高校生にとっては、学習英和辞典は授業・家庭学習の両方の場において必須の書物であり、これを抜きには英語能力の向上は望むべくもない。また、社会人や実務家及び専門家の英和辞典に対する需要も極めて高く、学習英和辞典を含めて、いかに高品質の英和辞典を世に出すかということが常に問われており、それが英語学者、とりわけ英和辞典編集者にとっての積年のテーマであることは論を待たない。

このような状況を背景に、各種工夫を凝らした学習英和辞典が世に送り出されている。同一の学習英和辞典一つを取ってみても、年月とともに版を重ねて改良され、現在に至っている。

しかし、各種の学習英和辞典を比べてみた場合、その特徴は様々である。例えば、同一の語の定義やその説明及びそこに挙げられている例文を見てみると、各々の辞典の個性や特色を見出すことができる。それらを実際に比較検討してみることによって、個々の

学習英和辞典の持つ問題点や長所が浮き彫りにされる。このことは、今後の、より価値の高い学習英和辞典編纂への礎となる。

本稿では、これを遂行する足がかりとして、まず学習英和辞典の第一目標である、各語義の記述の方法について、各種学習英和辞典を実際に比較検討する。学習英和辞典においては、品詞によって、語の定義の方法や例文の選定において当然違いが見られる。よって、本稿では、動詞に焦点を当てることとする。取り上げた各種の学習英和辞典の書評も行いつつ、それぞれの長所と短所を挙げ、短所に対しては、今後の改善の指針及び方策を挙げ、学習英和辞典における理想的な動詞の語義の記述法を考える。

1. 学習英和辞典の目的

ここで、本稿における学習英和辞典の具体的な比較考察に入る前に、学習英和辞典のあるべき理想の姿を定義しておくことにする。そしてそれを、本節の終わりで内容別に6つの項目に分け、今後の研究への指針を示すとともに、本稿においては、そのうちの第一項目である、語義の記述と類義語の説明に関して、考察を行うこととする。

学習英和辞典の究極の目標は、中高校生の英語学習の際の手引きと理解の拠り所になり、さらには一般社会人が一般的な英語を理解するための使用にも耐えう

(2003年1月6日 受理)

* 宇部工業高等専門学校英語教室

る質と量を兼ね備えることであるが、このこと自体が、学習英和辞典編纂の際の最大の課題といってよいだろう。編纂者が常々悩まされるのは、収録語数ではできるだけ増やしたいが、学習辞典である以上、ページ数も限られている。それでも多くの語を収録すれば、今度は各語の語義やその説明、例文が不足してしまうということである。このバランスをいかに適切なものにするかが重要なのであるが、逆に、特定の使用目的を優先するため、このバランスをあえて考慮しないものもある。『リーダーズ英和辞典』¹⁾などは、その典型といえるだろう。この辞典は、サイズとしては2900ページと、少し項数は多いが一般の学習英和辞典サイズに分類できよう。にもかかわらず、その収録語数は、他の学習英和辞典のそれとは比較にならない。後者が多いものでも10万語程度なのに対し、前者は27万語と、圧倒的である。これは、リーダーズの目的が、他の学習英和辞典に見られる、例文の多用による語義の説明というよりは、例文を必要最小限に絞った、百科辞典的語彙辞典を提示することにあるからである。リーダーズ初版において、編者である松田は次のように述べている。

「…与えられたスペースにできる限り多くの語を入れるようにした…一定のスペース内で語数を増やせば1語の記述にあてることのできるスペースは必然的に小さくなるが、本辞典は、読むための情報に的を絞り、書くためあるいは話すために必要な情報と学習辞典の要素はある程度割愛して収録語数を増やすようにした。したがって、学習辞典に比較すれば例文などはかなり少ないかもしれない。」

すなわち、リーダーズでは、一般の学習英和辞典に見られるような、語義のみならずその用法をも豊富な例文とともに示すことにより英語学習者の手助けをするというよりは、むしろある程度の英語能力を持った者を対象にした語義の確認と、その文化的背景の解説に主眼を置いているのである。このことは、リーダーズの使用者層が中高校生ではなく、ほとんどがある程度英語能力を有する英語関係の実務家や専門家であることから実証されるであろう。このような辞典は、最初から他の学習英和辞典とは目的を異にしているわけであるから、両者を単純比較することはできない。

ここでいう学習英和辞典の目的とは、あくまで中高校生を中心とした、文字通り英語学習者に対して、語義の提示のみならず、その用法を文法的説明と絡めながら、適切な量と質の例文とともに説明することによって、学習者の手助けをすることである。すなわち、以下の要素全てを、程度の差こそあれ、満たすもので

なければならない。

- ①各英単語に対し、適切な日本語による語義が記述されていること。類義語については、その語義や用法の違いが適切に説明されていること。
- ②多義語については、その語の持つ各意味が有機的・系統的に分類・整理されていること。
- ③品詞・発音記号の表記はもちろんのこと、文型や頻出構文等の表示があり、文法と関連させた説明が十分であること。
- ④学習者が犯す典型的な誤りを挙げ、正用法を示すとともに、注意を喚起していること。また、例文が質・量ともに必要十分であり、その語の用例として適切であること。
- ⑤必要に応じて、語源を含めた文化的背景が解説されていること。
- ⑥接頭辞、接尾辞などに代表される、語の構成要素を適宜示し、語の意味を構造的側面から解説している場合もあること。また、派生語の記述も十分であること。

これらの要素をいかに効率よく兼ね備え、学習者の便宜に供しているかが、学習英和辞典の価値を決定するのであり、また、その価値を高めることが、学習英和辞典編纂の際の究極目標でもある。

2. 使用する辞典

本稿では、学習英和辞典の比較考察を、動詞の語義とその類義語の記述に特化して行うことは先述した。動詞は、構造的に名詞と並んで英語の中核をなす構成要素であるばかりでなく、その用法は、文法的にみて、他のどの品詞よりも複雑であると言える。それ故に、学習者が英和辞典をひく場合も、動詞に関して調べる場合が相当多い。このような状況から、学習英和辞典においてはどれをとって見ても、動詞の記述には多くのスペースを割き、語義・用法・文法的説明など多岐にわたって詳述している。とはいえ、各辞典ともに、それらの記述に際して独自の工夫が見られ、他の辞典とは一線を画そうとする努力も感じられる。次節以降で、実際に動詞の記述を参照しながら、それぞれの辞典の特色を考察し、よりよい学習英和辞典の備えるべき条件等を考えてゆくのであるが、ここであらかじめ、その比較考察に使用する辞典を挙げておくことにする。これらはいずれもページ数に大差なく、サイズとしては中型学習英和辞典に分類され、その対象の中心として文字通り、英語を学習する中高校生を念頭において

①『ジーニアス英和辞典 第3版』²⁾

- ②『グランドセンチュリー英和辞典』³⁾
- ③『新グローバル英和辞典 第2版』⁴⁾
- ④『ユニコン英和辞典』⁵⁾
- ⑤『スーパーアンカー英和辞典 第2版』⁶⁾

また、今回の考察にあたっては、発行年度がほぼ同時期なもの、かつ最新のものを揃えるよう努力した。英和辞典は年月の経過とともに改良されるのが当然であり、それは収録語の選定から語の定義・説明に至るまで可能な限りアップ・トゥ・デートなものでなければならないからである。また、発行年度をほとんど揃えることによって、ほぼ同時期に、各辞典がどこまで工夫を凝らしているかに関して、同条件での評価が可能となるのである。

3. 考察と検討

ここでは、前節で挙げた各学習英和辞典に収録されている動詞の語義記述に関して、第1節で述べた6つの項目のうちの第一項目に関してどれほど配慮して作成されているかを、実際に比較検討し、問題点を指摘する。

英語学習者の頭を悩ませる問題の一つに、類義語の問題がある。英語のネイティブ・スピーカーであればその微妙な語義・用法の違いが直観的にわかるような場合であっても、外国語として学習する者にとっては、それがわからない場合が多い。このような場合のために、一般の学習英和辞典とは別に、その違いを解説した書物もある。類義語辞典などは、その典型である。例えば、日本語では一般的に「禁止する」と訳される forbid, prohibit, ban の3つについて、『英語類義語活用辞典』⁷⁾では、

「forbid は絶対権威をもって禁止することで、その権威の持主は命令は守られることを当然のこととして相手に対する。たとえば親が子供に、雇用者が雇人に、教師が生徒に何らかのことを禁じる時に使う。

prohibit は forbid よりも公的な禁止令である。法律によってすべての人の利益のために禁じられるのである。

ban は上記の2つに比べて社会的、民衆的と言ってよく、宗教や道徳観から望ましくないものとして禁ずる場合に多く使う。」

と、詳しくその違いが述べられている。となれば、類義語どうしの相違を理解したい場合には類義語辞典をもっぱら使うべきだということになりそうである。しかし、学習英和辞典において全てこの役割が免責されるわけでは、無論ない。学習英和辞典の使用者層の中心は中高生である。彼らが、例えば普通の授業やそ

の予習復習の際に使用するのはいよいよ学習英和辞典であり、類義語辞典にまで手を伸ばして調べるという作業は、行わないことの方が多いであろう。そうした状況を鑑みた時、学習英和辞典を参照した場合に、類義語どうしの違いに、限られたスペース内ではあるが、言及していることが必要不可欠であるし、学習者にとっては多いに手助けとなる。では、実際にそれらはいかに記述されているか、各学習英和辞典を見てみよう。

ジーニアス：

forbid <人・事情が>～を禁ずる、許さない
(類：ban, prohibit)

prohibit <法・団体などが><行為・事>を禁止する (ban) <<個人が禁止する場合は forbid>>

ban <出版・行動など>を(法的に)禁止する、<人が～するの>を禁止する<<短い語なので新聞見出しでは prohibit, forbid の代用語として用いられる>> センチュリー：

forbid を禁じる、禁止する、許さない

prohibit を禁止する、禁じる<<文章用語。prohibit が形式ばった語で「権力、法律による禁止」を表すのに対して、forbid は日常的な語>>

ban を禁止する

グローバル：

forbid ～を/～することを禁じる、禁止する、許さない<<禁止の意味で最も普通の語。主語は親・雇主・医師が多く、その禁止が守られるのが当然と期待される→ban, prohibit>>

prohibit ～を/～することを禁止する、禁じる<<形式ばった語で「権力、法律による禁止、非合法化」を表す→forbid>>

ban ～を禁止する、禁じる<<社会的・法的な禁止→forbid>>

ユニコン：

forbid ～を/～することを禁じる、禁止する

prohibit <法・団体などが>～を禁じる、禁止する (forbid)、<人に>禁じる

ban (法的に)～を禁止する

アンカー：

forbid ～を禁じる <<類語 forbid は一般語で、親や教師などが「～するな」と命じることをいう。prohibit は堅い語で、法律や規則で禁止すること。ban も公的に禁止することをさすが、特に「よくないことだから禁止する」というニュアンスがある。また、短いので新聞の見出しで forbid, prohibit の代わりによく用いられる。>>

prohibit (人が)～を禁じる、禁止する (→forbid)

《類語》)

ban (法律・世論などによって)(有害とされる物・事)を禁じる(→forbid《類語》)

まず、一つの語を参照したとき、他の類義語への言及がどのようになされているかという観点から、各辞典を考察してみよう。すると、まず、アンカーの説明が目をはく。forbid の項目において、語義の記述を最小限に押さえることによってスペースを確保し、別枠で類義語である prohibit や ban との違いについて、詳しく言及している。しかも、prohibit や ban の項目で、forbid 参照の注記もある。これにより、学習者は、これら3つのどの単語をひいても、類義語としての他の2語の存在を認知し、その微妙な意味の違いをも理解することができる。別の視点から言えば、学習者の語彙力向上の一助にもなっていると見える。ジーニアスもこの点、よく似ている。アンカーとは違って、別枠での独立した説明はないものの、各語の項目に、他の類義語2語についての注記がある。さらに、各語の説明では、主語や目的語の内容にどのようなものを取るかという選択制限についてまで、それぞれのニュアンスを簡潔にまとめてある。グローバルも説明が充実していて、前二者に似ているようではある。すなわち、学習者が ban や prohibit を参照した場合も、forbid の項目参照の注記によって、結果的には3語のニュアンスの違いが理解できるようにはなっている。ただし、例えば ban と prohibit の違いを知りたい場合には、いったん forbid の項目を参照した後、さらに互いの項目に飛ばなければならない点では、二度手間になってしまっているのが難点である。相互の語の連携が不十分であるといえる。センチュリーやユニコンは、このことがさらに顕著である。ユニコンにいたっては、forbid や ban を参照した場合には、他の2つの類義語の存在が認知できない恐れがある。

勿論、どの辞典においても、先述の『類義語辞典』ほどの詳しい説明はないものの、工夫次第でかなり役立つ情報を提供できることは、以上の各辞典の検討からみても明らかである。では、各語に関する情報量ではどうか。同じ「禁止する」という訳語が与えられても、「何が何を禁止するか」という、各語がとる主語と目的語の選択制限に関する記述がどこまでなされているかが、類義語どうしの相違を知るためには極めて重要である。その記述が、各辞典においていくつなされているかをまとめると、以下ようになる。

	主語	目的語
ジーニアス	2	2
センチュリー	1	0
グローバル	3	0
ユニコン	2	0
アンカー	3	1
平均	2.2	0.6

これを見ると、主語の選択制限に関する記述としては、センチュリーがやや不十分であることがうかがえる。それ以外の辞典は、おおむね限られたスペース内で努力しているといえる。これに対し、目的語の選択制限では、ジーニアスを除き、その記述は皆無に近い。これでは、主語の選択制限さえ守れば、何を禁止してもよいということになってしまうが、実際には、『類義語辞典』の記述にあるように、最低限、ban に関しては記述がほしいところである。この場合、スペース上の制約があるならば、ジーニアスのように括弧内に簡潔に選択制限を表示することによって、可能になると思われる。

ちなみに、ban が新聞などでは forbid や prohibit の代わりに用いられることは広く知られているところであるが、この事実と言及している辞典はジーニアスとアンカーだけである。英字新聞や英字雑誌は、難易度さえ適切に考慮すれば格好の学習教材であり、中高校生の知的欲求の充足にも資する。その意味では、この記述はぜひとも必要であると考えられる。

もう一つ、「話す」意味の talk, speak, say, tell の語義記述に関して、比較考察してみよう。『類義語辞典』では、各語のニュアンスの違いが次のように説明されている。

「talk は相手があってしゃべることを意味し、speak はただ声を出してものを言うことである。talk はある程度の相互信頼と親しみを前提としているのに対し、speak はあくまでも意志的に声帯を駆使してものを言うことである。…speak が声を出して発言することであり、talk が会話的感覚にウェイトがあるのに対し、say は言うことがらの内容にウェイトをおく…tell は idea なり情報なりを伝えることに力点がある。口でも、書いたものによってでも、または他の形によってでも、とにかく情報があなたに伝わることを言うのである。」⁸⁾

では、この説明が、各辞典においてはどのように効率よく集約され、記述されているかを見てみよう。

ジーニアス：

talk <人が> [~について] 話す、しゃべる《(1)
speak とほぼ同義だが、speak ほど話の内容は堅くな

い。(2) speak は聞き手がいてもいなくてもよいが、talk は通例聞き手が必要。》

say <人が>話す、しゃべる、物を言う、口をきく

say <人が><言葉・意味のあることなど>を〔人に〕言う、述べる、話す、口に出す<talk, tell, speak>と異なり、say は実際に話される言葉そのものを目的語にすることが可能》

tell <人が><人>に<事>を話す、語る、言う、～を伝える、告げる、知らせる

センチュリー：

talk 話す、しゃべる；相談する、話し合う<類語> speak は言葉を発することを、talk は自分の考えを語ることを強調する。また、speak が改まった話をする時に用いられ、talk は、くだけた軽い会話をかわすのに用いられる。》

speak 話す、ものを言う、口をきく

say を言う、述べる、話す< speak と違って必ずしも口頭でなくてもよい>

tell <物語などを>話す、<冗談などを>言う、〔人〕に話す、言う、語る

グローバル：

talk 話す、しゃべる、相談する、話し合う、協議〔交渉〕する<類語> 脈絡のある話によって自分の考えを語ることを強調する。又、くだけた軽い会話をかわしたり、無意味なことをべらべらしゃべる時にも用いられる。→speak》

speak 話す、しゃべる、口をきく、話をする、談話する<類語> 言葉を発することを強調する。また講演や演説のような、改まった重みのある話をする場合にも用いられる。→talk》

say を言う、述べる、話す< speak と違って必ずしも口頭でなくてもよい>

tell 〔物語など〕を話す、〔冗談など〕を言う；〔人〕に話す、言う、語る

ユニコン：

talk 話す、しゃべる<→speak 類義語>、話し合う、相談する

speak 話す、ものを言う、しゃべる<類義語> speak, talk 共通する意味→話す (utter words so as to express one's thoughts) speak は単に「口をきく」の意から、話の内容や聞き手の存在が重要な「演説をする」に至るまで広い意味を表す。…talk は普通「談話」を意味し、聞き手の存在を強く暗示する。speak と交換可能なことが多いが、speak よりも口語的》

say <言葉>を言う、～と言う、述べる<類義語> say, tell 共通する意味→言う (express ...in spoken

or written words, or by gestures) say は内容のあることを「言う」の意。tell は内容のあることを人に「伝える」の意。say と異なり、話を伝える相手が必要となる。》

tell <事実・物語など>を話す、言う、語る；<人>に告げる、知らせる<→say 類義語>

アンカー：

talk <プロフィール (ある話題について人と) 話す>が基本義。話し相手の存在が強く意識されている。》 話す、話をする、しゃべる；(人と)話し合う、相談する <類語> talk は「おしゃべりをする」「話し合う」の意で、通例話す相手を想定している。speak は「ことば〔言語〕を話す」「改まった内容の話をする」の意で、話してから聞き手への一方通行のことも多い。tell は「人にあることを告げる、知らせる」の意。》

speak 話す、物を言う、口をきく< (1) ほとんど意味のないことばから理路整然とした話までのあらゆる場合に用いる。(2) 発言者のことばをそのまま伝えるときは say を用いる；→say, talk 類語>

say <プロフィール (声に出して) 言う、述べる>が基本義。…tell はことばを使って他人に情報や事実を伝えることをいい、通例伝達相手が示される。また、say や tell が必ずしも音を出さなくてもよいのに対して、speak は音を出すことを強調する。》 ～を言う、述べる

tell <プロフィール (ことばを用いて情報を) 伝える>が基本義。相手に情報を知らせる含みが強く、この点、相手の有無と関係なく物を言ったり、話が一方通行になったりする speak や say と異なる。》 (あること)を話す、言う；を告げる、知らせる；(人)に話す、言う、しゃべる<→talk 類語>

これらの4語はすべて基本的な単語であるので、先の forbid, prohibit, ban のように、学習者が互いの類義語に対して未知であるという可能性は、ほとんどない。このような場合には、互いの類義語を参照するようにとの注記は必ずしも必要ない。しかし、基本語だけに、学習者が単に機械的に「話す」という日本語のみをあててしまっ、微妙なニュアンスの違いを認識していない場合が多い。そこで、その違いの説明が必要となるのである。⁹⁾ ここでも、各辞典で記述の内容や量に差が見られる。まず、アンカーの記述が、質・量ともに群を抜く。4語すべての項目において、互いの相違が明確に述べられている。量的には、『類義語辞典』よりも詳細であるといえる。さて、talk と speak の違いで大切な点は、前者が口語的で話し相手の存在を強く意識するのに対し、後者はやや堅くて話す行為そのもの

のに重点が置かれるということであるが、この点については、どの辞典でもおおむね指摘がなされている。しかし実際には、話し相手の存在を意識しない speak が、具体的にはどのような場合に用いられるといったことを学習者である中高校生自身が想像するのは難しいであろう。その意味では、グローバルやユニコンの説明は「講演」や「演説」などといった具体例を挙げており、非常にわかりやすいといえる。アンカーもよく説明はしているが、具体例がなく、やや理解しがたいかもしれない。ジーニアスやセンチュリーは、この点に関する記述がなく、不十分であるといえよう。いずれにせよ、「口語的」「文章的」「話し相手の有無」などの説明を記述する場合には、その実際上の具体内容をできる限り併記することが、学習英和辞典には望まれることである。対象者層の中心である中高校生にとって、いかに理解しやすいかがポイントなのである。さて、次に、say に関してであるが、学習者にとって特に重要なのは、発言内容そのものに重点が置かれ、またそれをそのまま目的語に取ることができるという点である。しかし、それを指摘しているのはジーニアスとアンカーだけである。¹⁰⁾ say のみが直接話法が可能であるということは、高校生レベルであれば必須の知識であることを考えると、この指摘は必ずしなければならない。センチュリーとグローバルでは、say が必ずしも口頭発言でなくてもよいとの指摘があるが、学習英和辞典という性格を考えれば、それよりも、直接話法が可能であるとの指摘を優先すべきであろう。なお、アンカーはこの両方の指摘があり、よく吟味されているといえる。最後に、tell についての記述を見てみよう。tell については『類義語辞典』にあるように、口頭であろうが文章であろうが、相手に考え・情報を伝達するという点で、他の3語と異なるという点が最も重要であろう。他の3動詞には普通はない「教える」という訳語が場合によっては与えられることも、この事実を裏付けている。しかし、この点を具体的に指摘しているのは、アンカーだけである。ユニコンでも、少し触れている程度である。英語学習者、とりわけ中高校生は tell に対して、他の3動詞同様「話す」という意味のイメージしか持たない者が多く、この点の記述はぜひとも必要である。

以上、学習英和辞典における動詞類義語の語義記述に関して、実際に比較検討して問題点を浮き彫りにしてきた。次節では、それらに対する改善試案を提示する。

4. 「学習」英和辞典のための語義記述

世に言う「中型英和辞典」は別名「学習英和辞典」と呼ばれることは周知のとおりであるが、これはこの種の辞典の使用者層の中心が、まさに英語の「学習者」たる中高校生であるためであることは言うまでもないことである。それならば、この種の辞典は、可能な限り、学習者の視点に立って作成されなければならないはずである。事実、各学習英和辞典の編集方針には、それを第一目標に掲げているものも少なくない。しかしながら、前節の類義語の語義の記述例で見たように、まだまだ改善の余地が残されているといえる。それに対する改善試案を以下に述べる。

まず、全体的なこととして、類義語の比較記述を別枠で設けることが極めて重要である。とりわけ、talk、speak、say、tell のような基本動詞間の意味の違いは、大胆にスペースを割いて解説するべきである。その際、各動詞の項目に個別にそれを記載するのは効率的ではない。例えば、アンカーなどは、それぞれの項目において説明は詳しいのであるが、重複する部分もあり、理解も断片的になる恐れがある。それよりは、どれか1つの動詞の項目に別枠を設けて視覚的にも目立たせ、集中的に記述した方が体系的に理解できてわかりやすい。残りの動詞の項目には、その集中記述のある動詞の項を参照するように注記しておけば十分であるし、スペースの節約にもなる。基本動詞ほど類義語の違いの説明にスペースを割く必要がない場合、例えば、前節の forbid、prohibit、ban がそれにあたるが、これについては、別枠の記述は必要ないが、やはり1カ所にまとめて、他の動詞の項目ではそれへの参照注記を簡潔に示しておく方が、学習者にとっては使いやすであろう。この場合、その参照注記は、各動詞の項目に必ずつけなければならない。それによって、未知の類義語でも認知し、語彙力向上にもつながる。

次に、動詞の取る主語や目的語の選択制限の記述であるが、これも必要なものは簡潔であっても必ず記載すべきである。前節の例でいえば、ban の目的語に関するそれである。さらにいえば、この時、抽象的な説明になりがちな場合は、具体例を併記することが望まれる。ban が「道徳的によくないものを禁止する」と説明しても、中高校生にとっては瞬時にはイメージがつかめないであろう。そこで例えば、<不法行為を>などと併記しておく、かなり理解しやすいのではないだろうか。

さらに、学習教材に配慮した編纂も望まれるところである。学習英和辞典が中高校生だけを対象にしたものでないことは事実ではあるが、しかしやはり対象の

中心は中高校生のはずである。ならば、その学習の場で使われる教材にもある程度配慮した内容であってもよい。英語の学習教材として、時事問題を扱う場合は極めて多く、その意味では、前節の ban の項目において、時事文では forbid や prohibit の代わりに ban が用いられるという注記が2つの辞典しかなかったのは残念なことである。学習教材を更に吟味した上での編纂が望まれる。

最後に、学習上優先される事項を優先的に記述することが肝要である。前節の例でいえば、say の直接話法の説明がこれにあたる。もちろん、文法上の説明もあるので、語義の欄ではなく、別の場所で文法的説明が施されているであろうが、意味的にも、発言内容をそのまま引用できるという点は説明に値するはずである。その意味では、say のみがこの用法が可能であるということは、英語学習上の最も基本的な事項であり、語義記述の欄にも、学習上最も優先すべき内容としてその言及がぜひともほしいところである。ところが実際は、ジーニアスとアンカーを除き、それは記述されずに、別の事柄が述べられている。学習上の優先順位という観点から、記述を考える必要がある。

以上、学習者にとってより価値が高く、かつ理解しやすい、あくまで「学習」英和辞典の動詞類義語の語義記述のあるべき姿を、試案として提示してみた。

5. まとめと今後の課題

本稿では、学習英和辞典の備えるべき条件をまず吟味し、ついでその一つである語義の記述、とりわけ類義語の記述方法に関し、動詞の場合を例に挙げて、実際に各辞典を比較考察しながらその問題点を示し、それらへの対策を示した。このことは、今後のより高価値な学習英和辞典編纂への一助となるだろう。

今後の課題としては、他の品詞、特に名詞及び形容詞の語義と類義語の記述に関して、考察する必要がある。動詞の場合とはまた違った問題点が出てくるはず

である。また、類義語だけでなく、いわゆる多義語の語義記述に対しても、各品詞に関して検討せねばならない。その他、第一節で挙げた③～⑥の項目についても、各辞典を比較検討しながら考察すべきである。これらの課題については、他日を期して取り組むこととしたい。

註

- 1) 松田徳一郎 編：『リーダーズ英和辞典 第2版』、研究社、1999. 以下、「リーダーズ」と呼ぶこととする。
- 2) 小西友七 他編：大修館、2001. 以下、「ジーニアス」と呼ぶこととする。
- 3) 木原研三 監修：三省堂、2000. 以下、「センチュリー」と呼ぶこととする。
- 4) 木原研三 監修：三省堂、2001. 以下、「グローバル」と呼ぶこととする。
- 5) 末永国明 他編：文英堂、2002. 以下、「ユニコン」と呼ぶこととする。
- 6) 山岸勝榮 編：学習研究社、2001. 以下、「アンカー」と呼ぶこととする。
- 7) 最所フミ 編著：p. 96、研究社、1984. 以下、「類義語辞典」と呼ぶことにする。
- 8) 同書、pp. 236-237.
- 9) これら4語に関しては、文法・語法上の違いも重要であるが、その問題については別の機会に扱うこととし、本稿では意味上の微妙な違いのみに焦点をあてる。
- 10) 発言内容をそのまま目的語に取るという用法は、すなわち直接話法の場合を意味する。その点からすると、これは文法・語法上の問題であるにとらえることもできるが、他の3動詞よりも「発言内容に重点を置く」という意味内容的問題として、ここではとらえることにする。